第17回建築環境コンペティション　最優秀賞受賞作品

受賞者：土橋悟（東京大学大学院社会基盤学専攻修士2年（地域/情報研究室）
大井友彦（フリー）

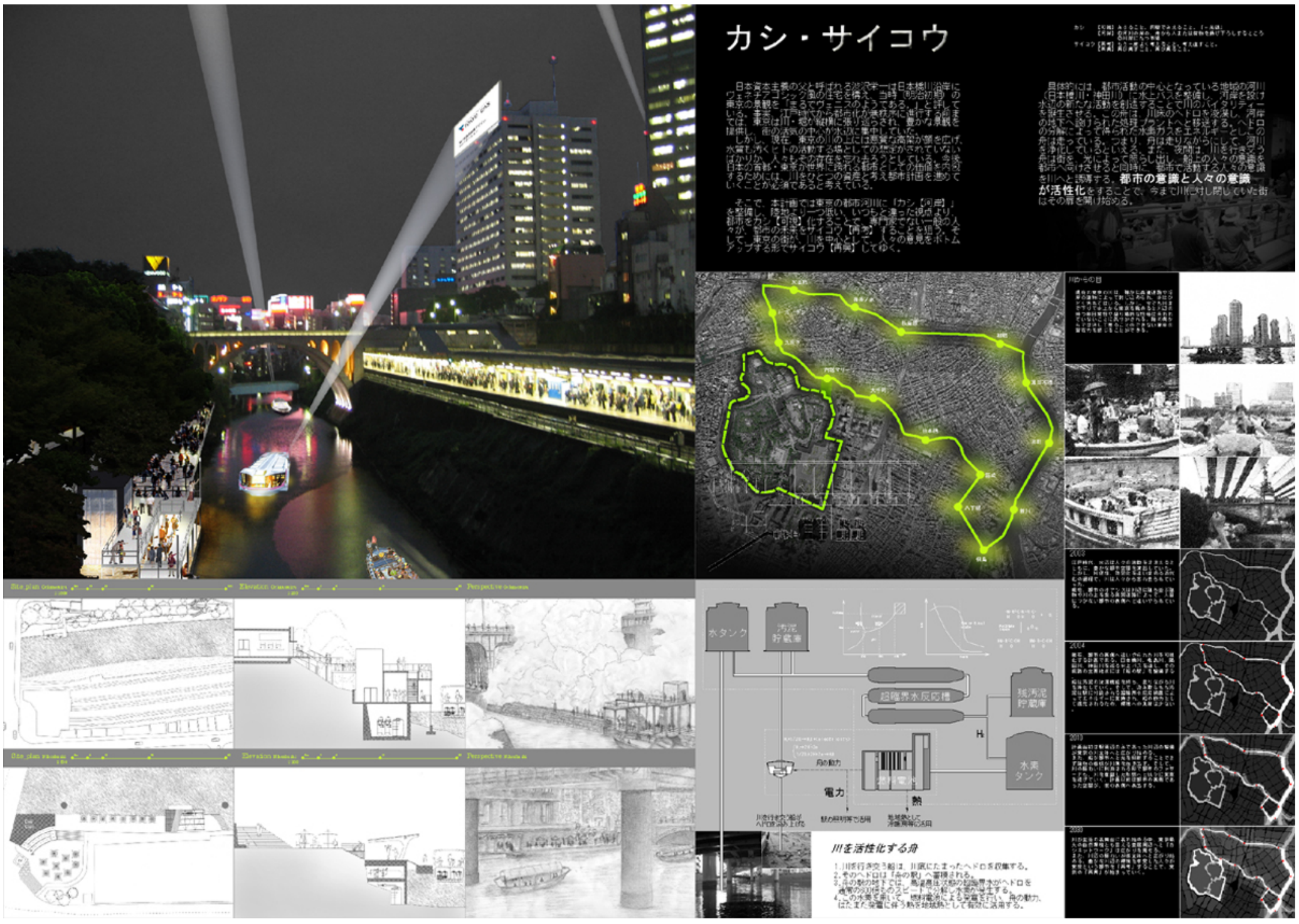
コンセプト

日本資本主義の父と呼ばれる渋沢栄一は日本橋川沿岸にヴェネチアゴシック風の住宅を構え、当時（明治初期）の東京の景観を「まるでヴェニスのようである。」と評している。事実、江戸時代から都市化が無秩序に進行する前までは、東京は川・堀が縦横に張り巡らされ、豊かな景観を提供し、街の活気の中心が水辺に集中していた。

しかし、現在、東京の川の上には悪質な高架が顔を広げ、水質も汚くヒトの活動する場としての想定がされていないばかりか、人々もその存在を忘れ去ろうとしている。今後、日本の首都・東京が世界に誇れる都市としての価値を内包するためには、川をひとつの資産と考え都市計画を進めていくことが必須であると考えている。

そこで、本計画では東京の都市河川に「カシ【河岸】」を整備し、陸地より一つ低い、いつもと違った視点より、都市をカシ【可視】化することで、専門家でない一般の人々が、都市の未来をサイコウ【再考】することを狙う。そして、東京の街が、川を中心として、人々の意見をボトムアップする形でサイコウ【再興】してゆく。

具体的には、都市活動の中心となっている地域の河川（日本橋川・神田川）に水上バスを整備し、河岸を設け水辺の新たな活動を創造することで川のバイタリティーを誕生させる。この舟は、川床のヘドロを浚渫し、河岸の地下へ設けられた処理プラントへと移送する。処理プラントでは、川から取り入れた水を高温・高圧状態の超臨界状態にし、触媒作用を活性化させた上でヘドロの分解を行う。そしてヘドロの分解によって得られた水素ガスをエネルギーとして、この舟は走っている。つまり、舟は走りながらにして、河川を浄化し、水という極めて自然の素材からエネルギーを取り出し地域に還元しているといえる。また、夜間は、川を行き交う舟は街を、光によって照らし出し、船上の人々の意識を都市へ向けさせると同時に、都市で活動する人々の意識を川へと誘導する。都市の意識と人々の意識が活性化をすることで、今まで川に対し閉じていた街はその扉を開け始める。



Last updated on .
Copyright © 2002 Department of Civil Engineering, The University of Tokyo. All Rights Reserved.